S.　Ashina

＜オリエンテーション＞

Ａ．テーマ：キリスト教思想研究入門――聖書学・聖書の思想

Ｂ．目的

この特殊講義は、すでに系共通科目「キリスト教学講義Ａ・Ｂ」を受講し、キリスト教思想研究に関心のある学部生、あるいはキリスト教研究の基礎の習得をめざす大学院生を対象に行われる。キリスト教思想研究を目指す際に身につけておくべき事柄について、またいかなるテーマをどのように取り上げるのかについて、解説を行う。

Ｃ．到達目標

・キリスト教学をテーマとした研究（卒論・修論）を行うために必要な方法や知識を身につけることができる。
・キリスト教研究に関する広い知見をもとに、自主的な研究に取り組む能力を養う。
・キリスト教学をテーマとした研究を発表するための訓練を受けることができる。

Ｄ．確認事項

受講者には、一回の研究発表が求められる（キリスト教学学部生には原則的に発表が求められる。ほかの者はレポートに代えることも可能）。成績評価は、この研究発表によって総合的に行う。

受講生には、常識や先入観を批判的に問い直す態度と積極的な授業参加（参考文献による復習を含め）を期待したい。質問は、オフィスアワー（金３、４）を利用するか、メール（Sadamichi.Ashina@gmail.com）で行うこと。

Ｅ．授業スケジュール

本年度前期のテーマは、「聖書学・聖書の思想」である。初回のオリエンテーションに続いて、次のような項目について、講義が進められる。一回の講義で一つの項目が取り上げられる。

１．オリエンテーション、導入――聖書と聖書学・考古学　4/8
２．旧約聖書１――宗教史的背景　4/15
３．旧約聖書２――創造　4/22
４．旧約聖書３――契約　5/13
５．旧約聖書４――王権　5/20
６．旧約聖書５――預言　5/27
７．旧約聖書６――知恵　6/3
８．新約聖書１――新約聖書学　6/10
９．新約聖書２――神の国　6/17
10．新約聖書３――イエスの譬え　6/24
11．新約聖書４――富　7/1
12．新約聖書５――国家　7/8
13．新約聖書６――グノーシス
14．受講者による研究発表１　7/15
15．受講者による研究発表２　7/22
16．フィードバック

＜導入＞

＊近代聖書学の成立とイエス伝研究

（1）近代聖書学とは何か

１．知・人間的現実の地平としての歴史（歴史化）→歴史主義・歴史的思惟

倫理的なあるいは宗教的な価値・理想は、歴史的な形成物(歴史的な原因と結果の連鎖の中にあり、その意味はこの連関という全体の中で規定される)である。

２．近代的知・歴史主義に基づいたキリスト教思想（研究）＝近代聖書学の成立

近代世界（近代的な日常性）へのキリスト教の適応という歴史的動向において。

・18 世紀「新しい解釈学をめぐる対決」(シュトゥールマッハー)

「正統主義はただ、十八世紀における対決を決定的な仕方で規定した、啓蒙された合理主義あるいはピエティズムという二つの運動と結び付けている所でのみの、生き延びることができた」(180)、「対決の結果は、聖書の歴史的・批判的研究をもはや長いこと回避せず、遂行して、まさにそのことによって聖書の道を指し示す声を、新たに確かなものにするということに対して備えることである。この結果に啓蒙主義とピエティズムは等しく与った。プロテスタントが自分の土台の力を信頼して、この対決を回避しなかったことは、全体としてプロテスタントが誇ってよいことである。」(181)

先駆者：ルターとカルヴァンという出発点、フラーキウス、ソツィニ派、グロティウス

トゥレティニ(1671-1737)、ヴェトシュタイン(1693-1754)、ゼムラー(1725-1791)

ベンゲル(1687-1752)

「十八世紀の新しい解釈学をめぐる論は、革新論の事実上の優勢と、革新論者と敬虔派とが共に肯定し実践した聖書の歴史的・批判的考察でもって閉じられる」(206)、「純粋に学問的なテキスト解釈が、いかに教会に役立ちもし、害を与えもするかは、テルトゥリアヌス以来すでに明白である。」(207)

・19 世紀「シュライアマハーの解釈学」「調停」

・シュトラウス(1808-1974)『イエスの生涯』(1835/36)

「イエスに関する聖書の伝承にあてはめた神話概念」は「無意識に作られる伝説という形で形成されたものと定義している」(219)

・バウル（1792-1860）とテュービンゲン学派

「シュトラウスにおいてすべての人にとって明白な仕方で始まる、批判的な歴史観とキリスト論的な教義との食い違いを、バウルはその研究によって解釈学的にも実際的にも克服した。正にこのことによって彼は後世に対して、歴史的・批判的神学はどうあるべきか、またいかに作業をする必要があるかということに対して、一つの尺度を打ち立てた。」(224)

「釈義が歴史的・批判的神学と理解されることを欲する限り、今日バウルとシュライエルマッハーより後退することはできないし、また許されもしない。」(224)

３．近代歴史学の成立→近代的知の基礎学としての歴史学

言語学、法学、哲学、神学、地質学、生物学など

・「十八世紀のいずれかの時点で、ドイツの大学、とりわけゲッティンゲン大学において、今までの単なる考証学から新しい科学的な方向、つまり、証拠となる史料の批判的検討と、出来事の成行を物語風に再構成することとを結合させるような方向に向かっての歴史学科の移行が始まった。この移行は、体系的でアカデミックな専門的研究としての歴史学の登場と密接にからみ合っていた。こうした変化と平行して、十九世紀に歴史研究が制度化さ

れて専門的職業となってゆくにつれて、歴史家にとって一つのパラダイムが出現してきた。そして、このパラダイムが、ごく最近まで大学において執筆される歴史叙述に影響を及ぼし続けてきたのである。」（イッガース、13）
・「出来事の相互連関を把握できるような歴史学の手法を発展させようとした」（16）、「歴史学的＝文献学的方法と呼ばれることになるこの方法を使用した一つのモデル」（20）、「人間を取り扱う諸々の専門研究分野にとって解釈学的で歴史学的なアプローチの仕方が価値をもっていることを強調した」（21）。
・「「科学的」学派は、史料の批判的検討を強調したにもかかわらず、歴史研究のイデオロギー的機能を弱めることに貢献しなかったばかりか、むしろ歴史研究が内政や外交上の目的のためにますます多く利用されるのを促進さえしたということなのである」（26）、「歴史主義の解釈学的な方式は、社会主義批判にうってつけであった」（27）、「国家的な公文書から読みとれるような国民国家の歴史」（40）。
↓
民衆史、心性史（アナール学派）
土肥昭夫『日本ポロテスタント・キリスト教史論』教文館、1987年。

４．トレルチ
「歴史的方法、歴史的思考法、歴史的感覚」「真の近代的歴史」
「第一は歴史批判にたいする原理的習熟であり、第二に類推の意味であり、第三はあらゆる歴史的事象間に生ずる連関がそれである。」（10）
「蓋然性の判断」（10）
「批判を始めて可能にする方法は、類推を適用すること」、「類推の全能とは、あらゆる歴史的出来事の原則的同質性を含むものである」、「聖書批評自体もまた諸伝承の類推によって成り立っている。」（11）
「歴史的生のあらゆる現象の相互作用」、「すべての出来事が恒常的な相互連関のなかにあり、全体も個体も互いに関連し一つの事象が他のものと関係しつつ、必然的に潮流を形づくることになるのである」、「われわれ自身の追体験能力」（12）

５．パネンベルク
・「トレルチによれば歴史的批判は、「すべての歴史的出来事の原理的同質性」を含む「類比の適用」に基づき、また、歴史的には普遍的な相関関係、「精神的・歴史的生のあらゆる現象の相互作用」があるという前提に基づいている。」（54）、「原理的同質性」、「あらゆる出来事は同質性を持つはずであるという要請」、「類比の持っている認識の力は、まさしく類比が非同質的なもののなかに同質的なものを見ることを教えるという点に基づく」（59）。
↓
方法論的現在中心主義＝歴史的思惟の解釈学的構造
制度的再帰性における歴史学・歴史研究

（２）イエス研究をめぐって
１．パネンベルク「聖書原理の危機」（1963 年の講演）
「テキストの思想世界と現代の思想世界との隔たり」、「聖書の諸文書は矛盾なく内容的に一致しているという意味での古い聖書正典（der biblische Kanon）の概念は、崩壊し去っ

た。」(13)
「イエスの歴史と使徒たちのキリスト教使信との関連を視野から失ってしまった。」(14)
「事実と意味、史実とケリュグマ、イエスの歴史とそれに関する新約聖書の多様な証言、これらの間に断絶があることが現代の神学の問題状況の一方の面の特徴となっている。」(15)
「伝承された種々のテキストとわれわれが生きている現在との解釈学的差異は、その両者を結合する歴史を構想することによって保持されねばならず、かつまた止揚されねばならない」、「普遍史の問題」(19)、「包括的な歴史の神学の意味での神学の普遍性を更新するように押し迫ってくる。」(21)
２．19 世紀におけるイエス伝研究とその挫折（Ａ．シュヴァイツァーの総括）
　　懐疑主義
３．ブルトマン『イエス』(未来社)
「人間と歴史の関係は、自然との関係とは違ったものなのだ」、「客観的自然観察があるという意味での客観的歴史観察はありえない」(7)、「叙述はただ歴史との絶えざる対話でしかあり得ない。」(8)
「方法の主観性」(9)
「以下の叙述は、普通の意味での客観性を要求し得ないとしても、他の意味では大いに客観的なのである。それはつまり評価を与えることを断念している」、「以下の叙述には、イエスを偉人や天才や英雄にするような言い回しは全く欠けている。」(11)
「イエスの「人となり」に就いての興味も排除されている」(12)、「私個人としては、イエスは自分をメシアと考えなかったという意見である」、「それは結局のところ、この問題については確かな事は何も言えないからではなく、むしろこの問題は副次的な事柄だと思うからである。」(13)
「その意志したところは、実際、一連のまとまった命題や思想として、教説としてしか再現され得ない」、「このものは事実ただイエスの教説としてのみ捉えられ得るのである。」(14)
「思想というとき、それは時の中に生きている人間の具体的状況と切り離せないものとして理解されている。すなわちそれは、動きと不確実性と決断の中にある、自身の実存の解釈なのである。」(15)
「その「教説」、その宣教なのである」、「実際さしあたりは教団の宣教なのである」(16)、「伝承の最古の層の中にある思想の複合体が私達の叙述の対象だからである。」(17)
４．伝承史：イエス→→断片的な口承伝承（弟子たち）→収集・文書化→編集
　　・現存のテキストから最古層へ遡及し再構成する。弟子集団＝共同体における伝承の法則性の確定→逆算（様式批判）
　　・編集者の意図の解明（編集批判）

＜参考文献＞
１．『聖書講座』全四巻（日本基督教団出版局、1965 年）
　『現代聖書学講座』全三巻（〃、1996年）
　『総説　旧約聖書』『総説　新約聖書』(日本基督教団出版局、1984年、1981年)
　『新版総説　旧約聖書』『新版総説　新約聖書』(〃、2007年、2003年)
２．山我哲雄『聖書時代史　旧約篇』岩波現代文庫、2003年。
　佐藤研『聖書時代史　新約編』岩波現代文庫、2003年。

３．田川建三『書物としての新約聖書』勁草書房、1997年。
４．P.シュトゥールマッハー『新約聖書解釈学』日本基督教団出版局。
５．出村彰・宮谷宣史編『聖書解釈の歴史　新約聖書から宗教改革まで』日本基督教団出版局、1986年。
６．ゲオルグ　G.　イッガース『ヨーロッパ歴史学の新潮流』晃洋書房。
７．トレルチ「神学における歴史的方法と教義的方法について」、『トレルチ著作集２』ヨルダン社。
８．パネンベルク「救済の出来事と歴史」、『組織神学の根本問題』日本基督教団出版局。